



南米[アルゼンチン]

1 農・畜産業の概況

アルゼンチン政府の農牧センサス（2018年）によると、農業経営体25万戸の所有面積は1億5500万ヘクタールであり、このうち4650万ヘクタールが農地、1億850万ヘクタールが牧草地として利用されている。中でもブエノスアイレス州、コルドバ州、サンタフェ州を中心とするパンパ地域は、平たんかつ肥沃な土地であることに加え、気候も穏やかで降雨にも恵まれており、農畜産物の主産地となっている（図1）。

アルゼンチン国内産業に占める農畜産業の割合は、国内総生産（GDP）の6～7％程度であるが、農畜産物輸出額は全輸出額の6～7割を占めており、同国にとって農畜産業は外貨獲得上、極めて重要な産業となっている。

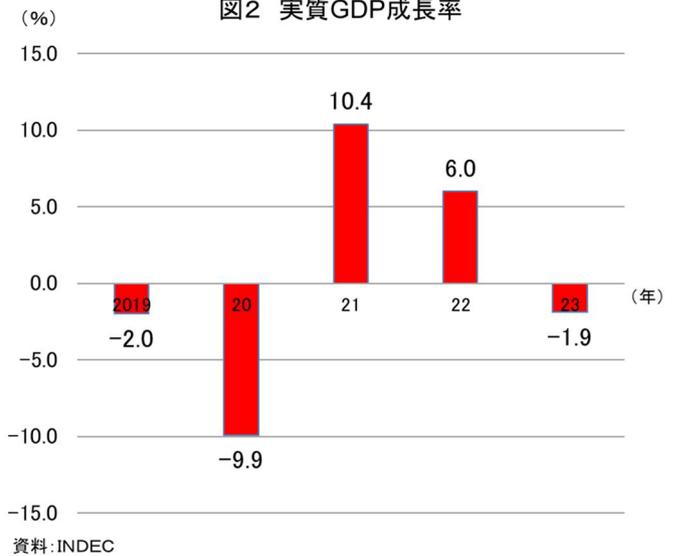
政策面について、23年12月10日に発足したハビエル・ミレイ政権は、慢性的な高インフレの解消を最重要課題に掲げ、そのために財政支出の削減や、二重為替レートの本一化などの政策を進めた。財政支出の削減により公共工事の新規入札を停止したほか、国家公務員の人員削減を進めるなどしている。また、23年12月に公式為替レートを50%超切り下げたことにより、国内の需要が縮小した。アルゼンチン国家統計局（INDEC）によると、干ばつの影響も加わったことで民間消費や生産活動が落ち込んだため、23年の実質GDP成長率は3年ぶりにマイナス成長となった（図2）。

図1 アルゼンチンの行政区分



資料：機構作成
注：黄色の州はパンパ地域の中心で農畜産物の主産地。

図2 実質GDP成長率



2 畜産の動向

(1) 酪農・乳業

アルゼンチンの酪農は、放牧を主体としてパンパ地域に集中している。主な生乳生産州は、生乳生産量の4割弱を占めるサンタフェ州、次いでコルドバ州（同3割程度）、ブエノスアイレス州（同2～3割程度）である。乳牛の主要品種はホルスタイン種が多く、全飼養頭数の9割以上を占めるとされる。

近年では、放牧に加えてトウモロコシなどの飼料穀物を補助的に給与する飼養形態が一般的となっている。一般的に小規模酪農家ほど放牧の割合が高く、規模が大きくなるにしたがって飼料穀物給与の比率が高くなる。

ア 生乳の生産動向

アルゼンチン経済省によると、2023年の生乳生産量は、1132万6000キロリットル（前年比2.0%減）と前年をわずかに下回った（表1）。

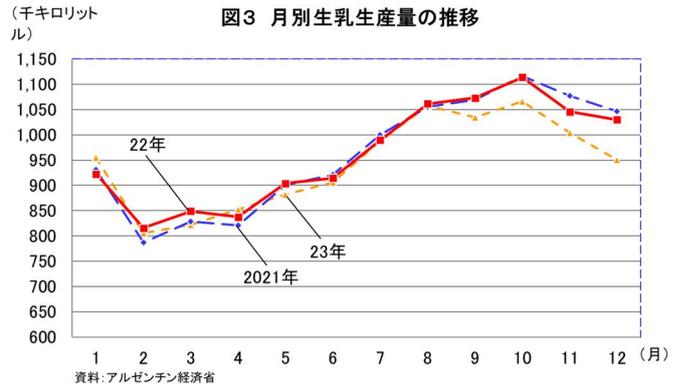
近年の生乳生産量を見ると、20～21年は良好な天候に恵まれたことや堅調な乳製品需要を背景とした生産者の増産意欲の高まりから、2年連続での増産となり、翌22年も前年並みであった。

同国の生乳生産は、春の10月に最も生産量が多くなり、夏場の2～4月にかけて落ち込む傾向にある（図3）。23年の生乳生産量は、9月以降、干ばつや不安定な経済状況が影響し、前年同月を下回る状況となった。

表1 牛乳・乳製品の需給
(単位:千キロリットル)

区分	2019	20	21	22	23
生乳生産量	10,343	11,113	11,553	11,557	11,326
輸出量	2,132	2,810	2,833	2,945	2,475
輸入量	85	48	71	75	53
消費量	8,194	8,394	8,634	8,684	8,863

資料:アルゼンチン経済省
注:数値は生乳換算。



イ 牛乳・乳製品の需給動向

アルゼンチン経済省によると、2023年の牛乳・乳製品の消費量は、886万3000キロリットル（前年比2.1%増）と前年をわずかに上回った（表1）。

23年の主要乳製品の輸出量は、22万2000トン（同12.9%減）と前年をかなり大きく下回った（表2）。品目別で見ると、チーズ（同12.8%増）、ホエイ（同4.8%増）および脱脂粉乳（同4.7%増）が増加する一方、全粉乳（同27.6%減）およびバター（同52.1%減）が減少した。ホエイを除く四つの主要乳製品の最大の輸出先はブラジルであり、主要乳製品の輸出量の合計のうち半数以上が同国向けとなっている。なお、ホエイの最大の輸出先は中国であり、次いでブラジルとなっている。

表2 主要乳製品輸出量の推移
(単位:千トン)

区分	2019	20	21	22	23
全粉乳	85	126	128	133	96
チーズ	39	45	52	57	64
ホエイ	42	33	40	38	40
脱脂粉乳	14	14	11	16	17
バター	8	14	16	12	6
合計	188	232	248	255	222

資料:「Global Trade Atlas」

注1:各品目に該当するHSコードは、全粉乳:0402.21/0402.29、チーズ:0406、ホエイ:0404、脱脂粉乳:0402.10、バター:0405。

注2:製品重量ベース。

ウ 牛乳・乳製品の価格動向

アルゼンチン経済省によると、2023年の生産者乳価（乳業が生産者に支払う生乳1リットル当たりの価格）の平均は、110.31ペソ（前年比2.2倍）と前年を大幅に上回った（図4）。これは、同国で急激なインフレが進行したためであり、同年の消費者物価上昇率は22年を上回る221.4%となった。



(2)肉牛・牛肉産業

アルゼンチンの肉牛生産は、ブエノスアイレス州、サンタフェ州、コルドバ州など肥沃なパンパ地域を中心にヨーロッパ系の温帯種であるアングス種を主体とし、ヘレフォード種やその交雑種による放牧肥育が一般的である。

口蹄疫ワクチン非接種清浄地域のステータスに関し、国際獣疫事務局（WOAH）により、これまで南パタゴニア地域と呼ばれるチュブート州、サンタクルス州、ティエラ・デル・フエゴ州に加え、北パタゴニアB地域と呼ばれるリオネグロ州とネウケン州の一部、さらには北パタゴニアA地域と呼ばれるリオネグロ州、ネウケン州、ブエノスアイレス州の一部が認定を受けている（図5）。また、残りの地域はすべてワクチン接種清浄地域となっている（2025年10月時点）。18年6月には、口蹄疫ワクチン非接種清浄地域から日本向けの牛肉輸出が解禁されている。

BSEについては、WOAHより「無視できるリスク」と評価されている（25年6月時点）。

図5 口蹄疫ステータス(2025年10月時点)



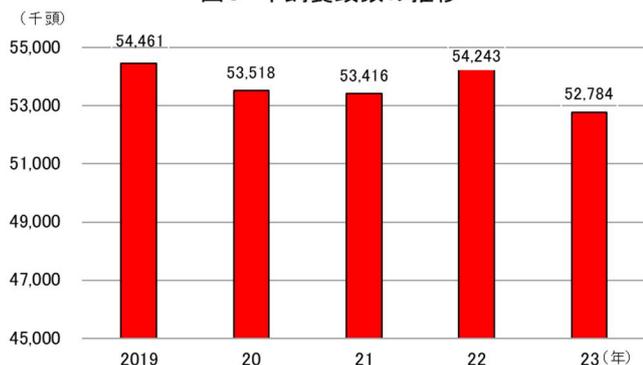
資料:WOAH

ア 牛の飼養動向

アルゼンチン経済省によると、2023年（12月末）の牛飼養頭数（乳用種を含む）は5278万4000頭（前年比2.7%減）と前年よりわずかに減少した（図6）。近年の牛飼養頭数の状況を見ると、国内の景気後退や中国からの需要などを背景に18年からは減少傾向となっていたが、22年には為替レートが不安定な中、肉用牛生産者による牛の留保傾向が強まったため、増加に転じたものの、23年に再び減少に転じた。

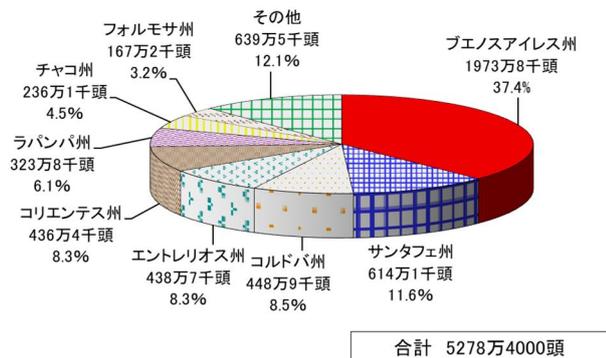
州別では、ブエノスアイレス州が1973万8000頭（全体の37.4%）と最大で、サンタフェ州（11.6%）、コルドバ州（8.5%）の上位3州で国内飼養頭数全体の6割弱を占めている（図7）。

図6 牛飼養頭数の推移



資料:アルゼンチン経済省

図7 牛の州別飼養頭数(2023年)



資料:アルゼンチン経済省

イ 牛肉の需給動向

(ア) 生産動向

アルゼンチン経済省によると、2023年のと畜頭数は1451万7000頭(前年比6.9%増)、牛肉生産量は328万7000トン(同4.3%増)と、いずれも2年連続の増加となった(表3)。これは、23年前半を中心に70年ぶりといわれる厳しい干ばつに見舞われたことで、水不足や牧草に深刻な影響が及び、牛の保留が困難となった牛肉生産者が、と畜場やフィードロット向けの出荷を増やしたためとみられる。

表3 牛肉需給の推移

区分	2019	20	21	22	23
牛と畜頭数(千頭)	13,873	14,008	12,987	13,580	14,517
生産量(千トン)	3,124	3,171	2,982	3,151	3,287
輸出量(千トン)	844	885	726	804	853
輸出金額(百万米ドル)	3,105	2,699	2,644	3,290	2,656
1人当たり消費量(kg/人/年)	51.1	50.7	49.4	50.9	52.2
去勢牛生体価格(ペソ/kg)	64.4	98.1	177.0	273.5	640.4

資料:アルゼンチン経済省

注:生産量、輸出量、1人当たり消費量は、枝肉重量ベース。

(イ) 輸出動向

2023年の牛肉輸出量は、68万476トン(前年

比7.8%増)と前年をかなりの程度上回った(表4)。一方で、輸出単価(同25.8%減)が大幅に減少したことにより、輸出額は27億4906万2000米ドル(同20.0%減)と前年を大幅に下回った。輸出先別に見ると、輸出量全体の8割弱を占める中国向けは54万2707トン(同9.1%増)とかなりの程度増加した。その他の主要輸出先の輸出量について、イスラエルやドイツおよび米国などは増加した一方で、チリやオランダおよびブラジルなどは減少しており、ばらついた結果となったが、輸出単価については、いずれの主要輸出先も減少した。

表4 牛肉輸出量および輸出額

区分	2023年			前年比(増減率)		
	輸出量(トン)	輸出額(千米ドル)	単価(米ドル/kg)	輸出量	輸出額	単価
中国	542,707	1,693,942	3.12	9.1%	▲26.2%	▲32.3%
イスラエル	37,545	228,388	6.08	16.9%	▲5.2%	▲18.9%
ドイツ	24,775	251,820	10.16	1.9%	▲3.6%	▲5.4%
米国	24,076	130,205	5.41	12.4%	▲1.6%	▲12.4%
チリ	19,029	137,986	7.25	▲17.3%	▲19.5%	▲2.7%
オランダ	16,193	154,177	9.52	▲5.7%	▲9.3%	▲3.9%
ブラジル	5,891	57,050	9.68	▲6.9%	▲16.8%	▲10.6%
イタリア	3,797	41,069	10.82	▲5.9%	▲9.7%	▲4.1%
ポルトガル	1,500	11,327	7.55	280.6%	211.1%	▲18.3%
その他	4,964	43,098	8.68	1.9%	▲10.6%	▲12.3%
合計	680,476	2,749,062	4.04	7.8%	▲20.0%	▲25.8%

資料:「Global Trade Atlas」

注1:HSコード0201、0202の合計。

注2:製品重量ベース。

注3:出典が異なるため、表3と数値は異なる。

(ウ) 消費動向

2023年の1人当たり年間牛肉消費量は、52.2キログラム(前年比2.7%増)と前年よりわずかに増加した(表3)。19年から21年にかけては減少が続いていたが、22年に増加に転じ、23年も増加が続いた。米国農務省(USDA)によると、と畜頭数が増加した分を輸出で相殺しきれなかったため、牛肉価格に下落圧力がかかったことが要因とみている。

ウ 価格動向

主要な家畜市場であるアグロメルカド家畜市場の2023年の肥育牛(去勢)出荷価格は、海外からの堅調な牛肉需要、飼料費の高騰など生産コスト上昇や急激なインフレの進行などによりペソ建てで見ると前年よりも大幅に上昇し、同年12月時点の取引価格は、生体1キログラム当たり1405.30ペソ(前年同月比4.9倍)となった(図8)。肥育牛(去勢)の出荷価格は23年1月以降、干ばつの影響により家畜の出荷頭数が増加す

る中で大幅に上昇している。また、不安定な経済状況を反映した急激なインフレに加え、23年12月12日に実施された50%を超える公式為替レートの切り下げなどの影響がさらなる上昇をもたらしたものとみられる。

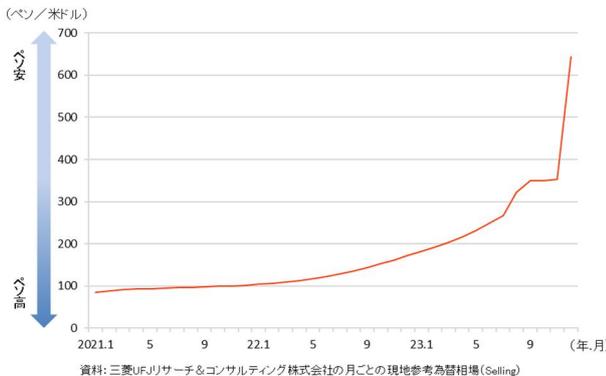
図8 肥育牛(去勢)の出荷価格の推移



(3) 飼料穀物

アルゼンチンの酪農米国農務省(USDA)によると、2023/24年度(3月~翌2月)のアルゼンチンのトウモロコシ生産量は、世界の生産量の4.1%を占めた。牛肉生産は放牧が主体であることから、トウモロコシの国内消費は生産量の2割程度と少ない。また、トウモロコシ輸出量の世界貿易量に占める割合は、23/24年度は18.8%となり、米国、ブラジルに次ぐ世界第3位トウモロコシ輸出国である。同国のトウモロコシ輸出は17年以降、為替相場が米ドルに対して急速なペソ安が進行したことで価格優位性が増したことや、穀物の堅調な国際価格を背景に生産・輸出意欲が強いことが背景にあるとみられる(図9)。

図9 為替相場(米ドルに対するアルゼンチンペソ)の推移



一方、23/24年度(10月~翌9月)の大豆生産量は、世界の生産量の12.2%を占めた。23/24年

度大豆輸出量は、世界貿易量の2.9%とわずかであるが、搾油後の大豆かすの輸出量は世界第1位である。トウモロコシと大豆は作付け時期が近いいため、それぞれの価格動向が作付面積に影響する。

ア 主要な政策

アルゼンチンの輸出登録制度(ROE)は、国内への食料供給の安定と主要な食料品価格の上昇を抑制するため1976年に導入された制度である。この制度の下で、輸出限度数量や輸出許可書の有効期間などが定められていたが、2015年12月のマクリ政権発足後に廃止された。しかし、19年12月に発足したフェルナンデス政権は21年4月、穀物の輸出監視を強化するため、ROEに類似する新たな情報登録措置を導入した。

また、02年1月の通貨切り下げに伴う大幅な税収減を補完するため、通貨切り下げで恩恵を受ける主要輸出農畜産物に対し輸出課徴金(輸出税)制度が設けられた。15年12月に発足したマクリ政権は輸出志向型の政策を推進し、大豆など一部を除き輸出課徴金を撤廃したが、18年の経済状況の悪化によりその見直しを余儀なくされた。輸出規制強化など政策転換を打ち出したフェルナンデス政権は、トウモロコシや大豆などの輸出課徴金の税率を引き上げた。このほか、大豆の輸出拡大を図り外貨収入を増やすため、大豆の輸出に当たり公式為替レートより有利な為替レートを適用する輸出拡大プログラム(大豆ドル)を導入するなど、政府による市場介入の姿勢を強めた。

イ 飼料穀物の需給動向

USDAによると、2023/24度のアルゼンチンのトウモロコシ生産量は5100万トン(前年度比37.8%増)、輸出量は3626万トン(同43.7%増)と、いずれも前年度より大幅に増加した。また、大豆の生産量は4821万トン(同92.8%増)、輸出量は511万トン(同22.0%増)と、同じくいずれも前年度より大幅に増加した(表5)。トウモロコシおよび大豆の生産量増加の要因は、作付面積が増加したことに加

え、干ばつの影響を受けた前年度と比較して、天候に恵まれたためとされている。

表5 主要穀物生産量の推移
(単位:百万トン)

区分/年度		2021/22	22/23	23/24
トウモロコシ	生産量	49.50	37.00	51.00
	輸入量	0.01	0.02	0.01
	消費量	10.10	10.00	10.40
	輸出量	34.69	25.24	36.26
	期末在庫	1.80	2.32	2.48
大豆	生産量	43.90	25.00	48.21
	輸入量	3.84	9.06	7.79
	消費量	38.83	30.32	36.58
	輸出量	2.86	4.19	5.11
	期末在庫	23.90	17.00	24.05

資料:USDA

注:年度はトウモロコシは3月～翌2月、大豆は10月～翌9月。

ウ 価格動向

アルゼンチン経済省によると、2023年の穀物生産者販売価格は、トウモロコシが1トン当たり6万7687.23ペソ(前年比2.1倍)、大豆が14万5280.54ペソ(同2.6倍)と、いずれも前年より大幅に上昇した(表6)。20年後半から、生産者販売価格は、南米の乾燥気候、中国の輸入需要の増加、北米の北部地域の高温乾燥気候などの影響により急上昇した。このような状況に加え、22年以降はウクライナ情勢やインフレの進行などによりさらに価格が上昇した。

表6 主要穀物の生産者販売価格
(単位:ペソ/トン)

区分	2021	22	23
トウモロコシ	19,037.18	32,093.69	67,687.23
大豆	32,129.33	56,539.48	145,280.54

資料:アルゼンチン経済省

注:ロサリオ市場の価格